

## 編集室から

先月号の本欄でご紹介させて頂きました拙著。お蔭さまでお読みいただいた方から、嬉しくも面映いお言葉を頂戴しています。

齢八十を越えた丈母も熱心にページをめくってくれていますし、まるで自分に語りかけているようだ、それはそれは光栄なメッセージを送っていただく方もあり、返ってこちらが励まされ、無上の喜びに浸っています。

この本は、このニュースに毎号書かせて頂いております「濱のつぶやき」欄15年×12月。合計180編を再構成して一冊にまとめさせて頂いたものです。残念ながら一般書店には並ばず、電子書籍としてはアマゾンと楽天ブックスから、紙の書籍としてはアマゾンからプリント・オン・デマンド(POD)という形式で販売されています。PODとは、注文が入ってから印刷・製本・配送するもので、在庫を抱える必要がなく、出版社のリスクが減ります。

ただし、通常の出版と違い、まとまった印刷はないので、通例のように出版社から献本用にと十~二十冊ほどが、著者に届くということはありません。著者もアマゾンからしか入手できませんから、手に入れる価格はみなさまと同じです。それでも、御世話になった方々へのご挨拶・御礼には現物が欠かせませんので、せっせとアマゾンで自己発注を掛けています。(^^;ゞ(は)



Chintara

本ニュースにレギュラー執筆していただいている川島さんが「能登の夜市」の姉妹店を開店されました。上京された際、ご利用になってみてください。もちろん、川島さんご自身もお店に立っておられます。

日本酒バルChintara  
03-6427-8183  
17:00~24:00  
金曜17:00~28:00日曜祝休  
渋谷区道玄坂2-19-3  
ライオンズマンション道玄坂1階

このニュースは、計画に携わる若手の技術者を育てることを目的に発行を始めました。その後、計画という仕事の内容や、普段、計画マンがどのようなことを考えているのかなどに触れて、少しでも業界を知っていただければと考えて編集しています。

2016/04  
(株)アスリック  
<http://www.neting.or.jp/usric>  
〒920-1167  
石川県金沢市もりの里1-149-302

電話 076-233-7217  
Fax 076-233-7375  
Email [usric@neting.or.jp](mailto:usric@neting.or.jp)

2016/04  
(株)アスリック  
<http://www.neting.or.jp/usric>

## 卯 月



松川ベリの夕桜  
富山市にて  
by hama

## 濱のつばやき 『無知の知』

最近、経済セミナーを仰せつかる機会が増えた。経済学というより、個人の生涯に関する経済動向や、家計の今後のお話だ。学ぶことに熱心な方から「最近時折耳にする『老後破産・下流老人』について学びたい」との個人的な依頼に応じてお話ししたことが口コミで広まり、北陸三県で数度のお招きを頂いている。

依頼にお応えするため、改めて公表されている統計情報を調べてみると驚愕することばかりである。国税庁のデータでは、平成九年をピークに同二十三年まで民間企業就労者の平均給与は、ほぼ一直線に下がり続け、この約十五年で年額約六十万円、月五万円も減っている。

さらに厚生労働省の国民生活基礎調査によれば、平成八年と同二十三年の比較では、年収五百万円以上の世帯が軒並み減少し、逆に同未満の世帯が急増している。また、OECD三十カ国の中で、日本の貧困率はなんと四番目に高い。

経済大国と言われていたこの国の民は、いつの間にかこんなにも貧しくなっていたのか…。

\*\*\*  
ネットに流れてくるニュース記事を眺めていると、気になる記事があった。

生活保護を受けている半病の老人が、GW目前に迎える契約満了を期に、六畳一間の粗末なアパートから退去を求められている。このままでは次の住居が見つからず路頭に迷いそうだという。

齢七十に近い彼は、中学卒業と共に東北から上京。左官職人として腕を見込まれ、高度成長期からバブル期にかけて大いに稼いだという。ところが病を得て一転。家族とも別れ、貯えも底を尽きる。年金制度の存在など誰からも教えられず、未加入。生活保護に至る。役所の世話で今の住居に入れたものの、この顛末。総じて家主は、単身老人には貸したがらない。

\*\*\*  
今回、色々調べていて、気づいたことがある。「最も怖ろしいことは、『自分が無知である』ということを知らない(無自覚の)人の末路」である。

「自分が無知である」ことを知っ(自覚)している人は、「知らないが故に」真摯に学ぼうとする。九割方知っている話を耳にしたとき、知っている方に重心を置いて「ああ、それ知っているよ」と、学びの姿勢を放棄してはいまいか。この姿勢には、「無知の自覚」は恐らく、無い。知らない一割に意識を向け、「なにそれ？教えて」という姿勢を取るほど、多くの知識・知恵の情報が入ってくる。

「無知の知(自覚)」があれば、知識・知恵が増える機会に恵まれやすく。「無知の無知(無自覚)」であれば、逆に知識・知恵を得る機会を失つ。なんとも、ジレンマではないか。

\*\*\*  
知識・知恵に乏しいと、人生の後半で思わぬ事態に

陥ったとき、なす術がない。「そんな事態になるとは知らなかった(予想もしなかった)」からである。未体験の災害・アクシデントに遭遇したときもそうだが、人間はそもそも、想定外・予想外」の事態に直面したとき、最も脆い。

「リスク対策」のポイントは、「あらゆる事態を想定して、リスクを洗い出し、それに備えること」である。「リスクが在る」ことが悪いのではない。「リスクを把握していない」ことの方が、リスクに出くわした時に何も対処ができない自分を作り上げてしまう。

どんな事態にも目を背けず、正面から向き合わない限り、リスクの対策にはならない。まして、「そんなリスクが在ったのか」と感情的・気分的に落ち込んでいることは、何の解決にもならないばかりか、立ちすくんだままで一歩も前に出ていない。つまり状況を何も変えられない最もアブナイ状態に留まることを意味する。

「『無知』は恥ずかしいこと」ではない。むしろ「無知の無知」こそ恥ずかしい。「無知」が劣っていることではなく、「『無知』に向き合おうとしない意識」がリスクを招き、「知らない」間に自らに貧乏くじを引かせてしまう。こちらの方が、どれだけ恐ろしいことか。

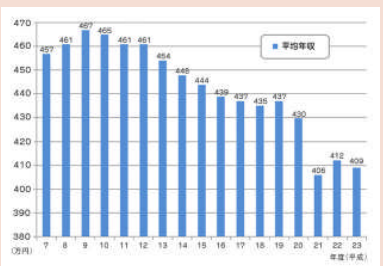
\*\*\*  
今年の年初報道に「生活保護世帯が百六十三万世帯と過去最高になった」とあった。うち半数が老人世帯。人生後半での貧困化が進行している。

さらにはこれに介護リスクが付け加わる。男性の平均寿命は、約八十歳。健康寿命は七十二歳。女性の平均寿命は、約八十七歳。健康寿命は七十五歳。つまり、男性は平均八年間、女性は平均十二年間、程度の差はあれ何らかの介護が必要な期間のようである。この間の介護費用・負担は、誰が看るのか。

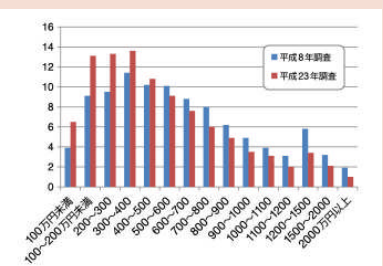
「老後破産」を特集した某週刊誌の見出しに、「長生きなんか、するんじゃないかった」とあった。長寿を祝う風習・意識が根強いこの国で、これがどれほど哀しい現実を物語っていることか。

自分の老後は、自分で備えるしかない。そのために「無知の知」を忘れず、新しいことを学び、挑戦し続けたいものだ。

これからも「賢者の知恵」ともいえる「無知の知」を以って、真摯に学ぼうとする方々と共に、学びと実践を深めていきたいと思う。



国税庁 H23年民間給与実態統計調査



厚生労働省 国民生活基礎調査

浮き草のごとく56 福井県立大学 地域経済研究所 江川 誠一  
『評価関数は名人の読みを超えるのか ~あっけなくその日が来た~』

二〇一六年三月九日、超弩級の激震。黒番の棋士が震える手で盤上に白石を置いた。白番の表情はうかがい知れない。人類が囲碁でAI(人工知能)に負けを認めた瞬間だ。

事実上の人類代表は、囲碁界の魔王とも呼ばれる韓国のイ・セドル九段。つい先日、日本最強の棋士井山裕太六冠を降している。棋聖・名人・本因坊・王座・天元・碁聖を保持し残る十段位に挑戦中の、日本では誰も止められない存在を。セドル九段は間違いなく世界最強棋士の一人である。勝てると踏み臨んだ一局で、まさかの結果に何を思ったのか。

AIは、GoogleのAI部門であるDeepMindが開発した囲碁プログラム「AlphaGo」。私は以前のブログで次のように豪語していた。「囲碁では最強コンピュータにオレでも勝てる」

それがどうだ。AIが勝っちゃったじゃないか。リアルタイムの速報ページにも、国内外プロ棋士の動揺がみてとれた。囲碁は盤面が広いので、チェスや将棋とは桁違いに打ち手の数が多く、コンピュータが人類に勝つのはまだまだ先のことと言われていた。

棋譜を並べてみる。AlphaGoは序盤から中盤にかけて変な指し手が時々顔を出す。人類が感覚的に嫌う手を躊躇なく選ぶ。こっちを打ったかと思えば次の手はそっぽを向く。少し強引で散漫。私の印象だけではなく、プロ棋士の解説でも同じことが書かれている。序盤の指し手を"子供っぽい"とリアルタイムで酷評し、早々とセドル九段の勝利を宣言したものの。

しかし、これらはあくまで人類の感覚で"変だ"と感ずること。AlphaGoにとっては合理的な選択なのだろう。結果が出た今となっては、人類は先入観があって勇気がなく一方に固執していたということだ。そして、AlphaGoは対戦を重ねるごとに強くなる。疲れないし衰えないしプレッシャーもない。今回の五戦で、セドル九段は三連敗後、驚異的な精神力を発揮して一矢を報い、結果、人類側の一勝四敗となった。とてつもないプレッシャーのなか、最後まで戦った彼には最大級の敬意を評したいが、対策は立てられそうにない印象だ。

ある局面における優劣を、静的に数値で評価するための関数のことを評価関数と呼ぶ。あっけなく表題のその日が来たことに言葉を失う。AIはついに、圧倒的計算力など機械ならではの強みに加え、人類に伍する学習能力を持ったということか。評価関数を人間がプログラミングする段階ではもはやなく、評価関数をAIが自ら作り出す時代が到来したということか。Google DeepMindの行き着く所はどこなのだろう。正直、怖い。

『また今年も桜の季節です』  
株式会社GARBAGE代表 川島 嘉浩

日本人って桜に弱いですね。例えば歌のタイトル数で固有の花の名詞がついたモノの中では圧倒的に桜(さくら・サクラ・SAKURA)が多いそうです。また古くは古事記には、「このはなさくやひめ」という神様の名前が出てきており、桜の花のように美しい姫という表現がなされており、古くから美しさを表す表現として桜が用いられていたようです。また、平安時代にはすでに宮廷で花見の宴が開かれていますし、源氏物語には、「花の宴」なる巻があって、貴人が宮廷で花見の会を催す描写があります。

では、なぜこんなに日本人は桜を好むのでしょうか？

ひとつは、何と云っても見るものをひきつけるあの豪華さにあるかもしれません。梅、桃と比べて花数が多く、満開時のあの迫力は見事と呼ぶしかありません。私も有名な桜の名所が通勤時のルートにあるのですが、この季節は20分ほど早く家を出るようにしています。そしてその散り方もまた人を魅了します。散る様を花吹雪と呼ぶのは、けっして大げさな形容ではありません。

そして最も愛される理由としては、花期が短く、一斉に散るという桜そのものの生き様が、潔しを良しとする、日本人の国民性に合うのではないのでしょうか。紀友則、在原業平、西行など、平安時代の著名な歌人が、桜の短命さと人生の儚さを重ね合わせた歌を詠んでいるということからも日本人の中での桜は、特別な存在であり続けているという事が伺えます。3月・4月の出会いと別れという季節性と桜の持つ、華やかさ・儚さが相まって現在のような、『桜を愛でる』という慣習にたどり着いたのかもしれない。

私におきましては、この季節になると風邪をひくという嫌なエピソードしかございません。その理由は、まだ肌寒いこの時期に外で宴会が続くためという非常に恥ずかしいものなのですが、夜桜の中、ヒラヒラと舞い散る花弁を見ながら、お酒を飲んでいるとどうしても腰を上げることができないんですねー。ちょっとおかしい話ですが、違う世界に引き込まれていくような幻想にかられる感じです。そんな経験皆さんはありませんでしょうか。

『富士の国から ~大魔神のたび~』ハルビンへの旅 2015.7.26~8.2  
静岡県小山町まちづくり専門監 溝口 久

ハルビンといえば日本陸軍731部隊の細菌兵器開発のために人体実験を行い3000人も中国、ロシア人を虐殺した施設があることが知られている。終戦直後、隠蔽工作のため建築物の多くは破壊され機密資料も焼却され、残された広大な敷地は工場や住宅に使われていたが1985年に侵華日軍第731部隊遺址として開館、2006年以降は立ち退きと遺跡発掘や修復が進められている。訪ねたときは火葬の煙突三本をデザインに取り入れた、いかにもオドロおどろしい建物を建築中、相当に刺激的な展示や映像が見られることになるのではと思う。反日感情をかなり高めるのではという心配がある一方、戦争の残虐、人間が集団になると起こし得る愚行を未来永劫伝え、二度と戦争を起こさない強い仕掛けとなることを期待したい。来年の夏にはきっと見学できることなるう。広島、長崎の原爆資料館を見た時以上にショックを受けそうだ。

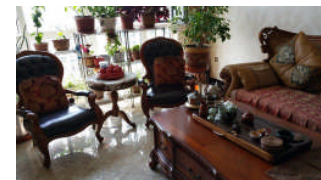


泊まったホテルの前を松花江(しょうかこう)という川が流れている。岸は公園として整備され、散策、太極拳、釣り、楽器の演奏に相当数の人々が思い思いに楽しんでいる。朝5時過ぎに川に目をやると何人も人が川を横断ではなく、流れの方向に延々と泳いでいるのである。オレンジ色の浮きを紐に結んでいる。どうやらタオルやら着替えが入っているのではと思われる。川は泥水、岸辺にはごみも多く、とても泳ぐ気になれるような代物ではなかった。

振国さんのマンションを訪ねることになった。ハルビン都市部に戸建て住宅は見当たらない。超高層のマンションが建ち並ぶ。複数の棟の集合で一つの団地を形成し、中に入るには監視員のいるゲートでチェックを受ける。車は地下駐車場に収



まり、地上は公園になっている。大型ショッピングセンターでもどこに車を置いたかわからなくなる程の広い地下駐車場がある。振国さんのお宅は30階にある。エレベータに乗りキーを指すと30階にのみ止まる。エレベータを降りると二戸のみの扉がある。隣の隣の部屋に行くとすれば、改めて一階からエレベータに乗る必要がある。扉を開けるといきなり部屋だ。玄関というものが無い。ロシアでもそうだった。マンションはスケルトン売り、内装は別に発注となる。街中には家具、内装の大型専門店が立地している。センスも試されるし、知識も相当に必要になる。それにより生活へのこだわりが高くなり、このことは丁寧な暮らしぶりに繋がる。リビングの床は大判の石張だ。マイナス30にもなるハルビンで石では冷たいのでは？心配無用、床暖房があるし、熱源は温水が熱源供給センターから配管により送られてくるというのだ。スイカジュース、手作り葡萄酒、中国茶のおもてなしを受けた。何しろ語り合いができないので、口はもっぱら出されたものの入り口になるしかなかった。



前夜は友人の姉のお宅に訊ねた。ご主人は1985年に日本にいたという。ユニークな文具を世に出し続けることで有名な(株)キングジムで一年間研修されていたという。その時に岡山工場が竣工し、その記念の写真を額に入れ大切に保管されていた。また、社長はじめ会社の方々からの手紙も大切にファイリングされていた。日本語もかなり話すことができる。

ハルビンを後にする時刻が近づいてきた。高級な中国茶、茶器、ハチミツ、ビール、白酒、チョコレート、お菓子、ご馳走ばかりかスーツケースいっぱいのお土産まで頂戴した。他に話せる言葉がないこともあって「謝意、謝意」「再見、再見」を何度も口にしたり。そして、来夏にも来ることを約束した。富士山の麓にもどうぞと伝えはしたが、今回のもてなしには到底敵わない。せめて、中国語入門編程度はマスターしておきたい。(おわり)

